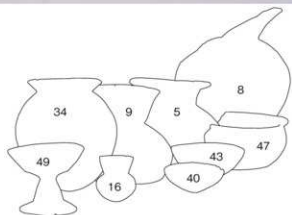


県道善通寺詫間線道路改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

旧練兵場遺跡

2016.3

香川県教育委員会



序文

旧練兵場遺跡は、県内で最大規模を誇る弥生時代の集落遺跡として知られています。今回報告しますのは県道善通寺詫間線道路改修に伴う調査についてです。

本遺跡は、これまでおとなとこどもの医療センター部分の西側を中心とした地点の調査が主だったものでしたが、今回の発掘調査は同センター南東隅の、これまで面的に調査が実施されていなかった地点での調査であります。その結果、狭小な調査区ではありましたが、古墳時代前期から中世にかけての遺構と遺物を確認し、中央微高地上での居住域の広がりをおさえることができました。また良好な古墳時代前期の一括遺物や、断片的ですが中世の条里坪界溝の確認など、貴重な成果をあげることができました。

本報告書が香川県はもとより全国の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの関係機関並びに地元関係者各位には、多大な援助と協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、埋蔵文化財の保護について今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成 28 年 3 月
香川県埋蔵文化財センター
所長 真鍋 昌宏

例言

1. 本書は、香川県善通寺市仙遊町に所在する旧練兵場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は香川県教育委員会を調査主体、香川県埋蔵文化財センターを調査担当者として実施した。
3. 発掘調査は、平成26年10月1日～同月31日に実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。
西村尋文・真鍋貴匡・井上加奈子・今井由佳・森后代
4. 現地調査及び報告書作成に当たって、下記の関係機関や多くの方々のご協力や教示を賜った。記して謝意を表したい。善通寺市教育委員会 地元自治会 大久保徹也
5. 本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センター真鍋貴匡が担当した。
6. 本報告書の遺構名は、調査時に使用したものの踏襲を原則とした。
7. 本報告書で用いる方位の北は、世界測地系の北であり、標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。平面直角座標は第IV系を使用している。
8. 本報告書の実測図は、以下の縮尺を基本としている。
土器（1/4）・石器（1/2）
9. 実測遺物に、赤色顔料や磨滅痕等の特徴が認められるものについては、実測図中にアミ掛けで表現し、個別に凡例を付した。
10. 本報告書において、出土位置を記録して取り上げた遺物の地点を、参考のために近接する遺構断面図に投影して表記している場合がある。
11. 本書に掲載した遺構写真は担当者が撮影し、遺物写真の一部は岡村印刷工業に委託した。
12. 遺構及び遺物観察表中の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局 監修『新版標準土色帖』2010年度版による。
13. 調査で作成した記録類及び出土遺物は、香川県埋蔵文化財センターで一括して保管しているので、活用されたい。

※ 地図は国土地理院地形図を使用しました。

本文目次

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査体制・整理体制	1

第2章 調査成果

第1節 調査区の基本層序	8
第2節 調査の成果	12

まとめ

遺構変遷	27
SH02 出土土器について	30

挿図目次

第 1 図	遺跡位置	2	第 15 図	SH03 平面図・断面図、出土遺物	19
第 2 図	既往調査位置	2	第 16 図	SH05 平面図・断面図	19
第 3 図	既往調査調査区	3	第 17 図	SH04 平面図・断面図、出土遺物	20
第 4 図	微地形復元図 (弥生時代の遺構検出面)	4	第 18 図	SD08 平面図・断面図	21
第 5 図	旧練兵場遺跡Ⅴ層下位の堆積状況の模式	8	第 19 図	SD08 出土遺物	22
第 6 図	全体図	9	第 20 図	SD02 平面図・断面図、出土遺物	23
第 7 図	調査区北壁①断面図	10	第 21 図	SD03 平面図・断面図、出土遺物	24
第 8 図	調査区北壁②断面図	11	第 22 図	SK02 平面図・断面図、出土遺物	24
第 9 図	SH02・SP27 平面図・断面図	12	第 23 図	柱穴平面図・断面図、出土遺物	25
第 10 図	SH02 遺物出土状況	13・14	第 24 図	包含層出土遺物	26
第 11 図	SH02 出土遺物 1	15	第 25 図	遺構変遷	28
第 12 図	SH02 出土遺物 2	16	第 26 図	中世の条里型地割と主要溝群	29
第 13 図	SH02 出土遺物 3	17	第 27 図	広口壺・直口壺・壺断面比較	30
第 14 図	SH01 平面図・断面図、出土遺物	18			

表目次

第 1 表	既往の調査一覧	5・6	第 2 表	旧練兵場遺跡出土土器観察表 (4)	34
第 2 表	旧練兵場遺跡出土土器観察表 (1)	31	第 3 表	旧練兵場遺跡出土土器観察表	34
第 2 表	旧練兵場遺跡出土土器観察表 (2)	32	第 4 表	旧練兵場遺跡出土土器観察表 (3)	34
第 2 表	旧練兵場遺跡出土土器観察表 (3)	33			

図版目次

巻頭写真	SH02 出土遺物		図版 7	SP03 検出状況 (南から)	41	
図版 1	調査区西側検出状況 (西から)	35	SP03 断面 (南から)	41	SD08 土層土器 (66) 出土状況 (西から)	41
	SP03・SH01 検出状況 (南西から)	35	図版 8	SD03 土器 (89) 出土状況 (南から)	42	
図版 2	SH02 検出状況 (南西から)	36	SH01 完掘状況 (南東から)	42	調査区完掘状況 (東から)	42
	調査区東側検出状況 (南から)	36	図版 9	SD08 北壁断面 (南西から)	43	
	SD02 検出状況 (南から)	36	調査区東側完掘状況 (南から)	43	SD03・SH05 北壁断面 (南から)	43
図版 3	SD02 土器 (82) 出土状況 (南から)	37	図版 10	SH02 出土遺物	44	
	SD02 北壁断面 (西から)	37	図版 11	SH02 出土遺物	45	
	SH02 検出状況 (西から)	37	図版 12	SH02 出土遺物	46	
図版 4	SH02 東半埋土下層土器出土状況 (西から)	38	図版 13	SH02、SH01、SD08、SD02 出土遺物	47	
	SH02 西半埋土下層焼土出土状況 (南から)	38	図版 14	SD02、SD03、SP03、SP04、SP12 出土遺物	48	
	SH02 東半埋土下層下位土器出土状況 (西から)	38				
図版 5	SH02 東半埋土下層下位土器出土状況 (東から)	39				
	SH02SP27 検出状況 (西から)	39				
	SH02SP27 断面 (南から)	39				
図版 6	SH02 北壁断面 (南東から)	40				
	SH04 完掘状況 (南から)	40				
	SH05 検出状況 (南から)	40				

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯と経過

県道普通寺詫間線道路改修に伴い、平成25年度に中讃土木事務所及び香川県土木部道路課と香川県教育委員会との間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が行われた。当該箇所は旧練兵場遺跡の範囲内であり、隣接する箇所を平成25年度に普通寺病院統合事業に伴う発掘調査を埋蔵文化財センターが実施し遺構の広がりを確認していたことから、確認調査は実施せず発掘調査を行うことで合意した。発掘調査は埋蔵文化財センターが平成26年10月1日～同年10月31日に実施した。対象面積は112㎡である。整理作業は翌年、平成27年9月の1カ月間実施した。

第2節 調査体制・整理体制

平成26年度の発掘調査体制及び平成27年度の整理業務体制を以下に示す。

平成26年度

■香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 増田宏、副課長 川上泰

総務グループ 副主幹 松下由美子、主事 和木麻佳

文化財グループ 課長補佐 片桐孝浩、主任文化財専門員 山下平重、文化財専門員 松本和彦

■香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 真鍋昌宏 次長 前田和也

総務課 課長(兼)前田和也、主任 俊野英二・寺岡仁美・中川美江・高木秀哉・岩崎昌平

調査課 課長 森格也、主任文化財専門員 西村尋文 技師 真鍋貴匡

嘱託(調査補助員) 井上加奈子・今井由佳

平成27年度

■香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 増田宏、副課長 小柳和代

総務グループ 副主幹 松下由美子、主事 和木麻佳

文化財グループ 課長補佐 片桐孝浩、主任文化財専門員 山下平重、文化財専門員 乗松真也

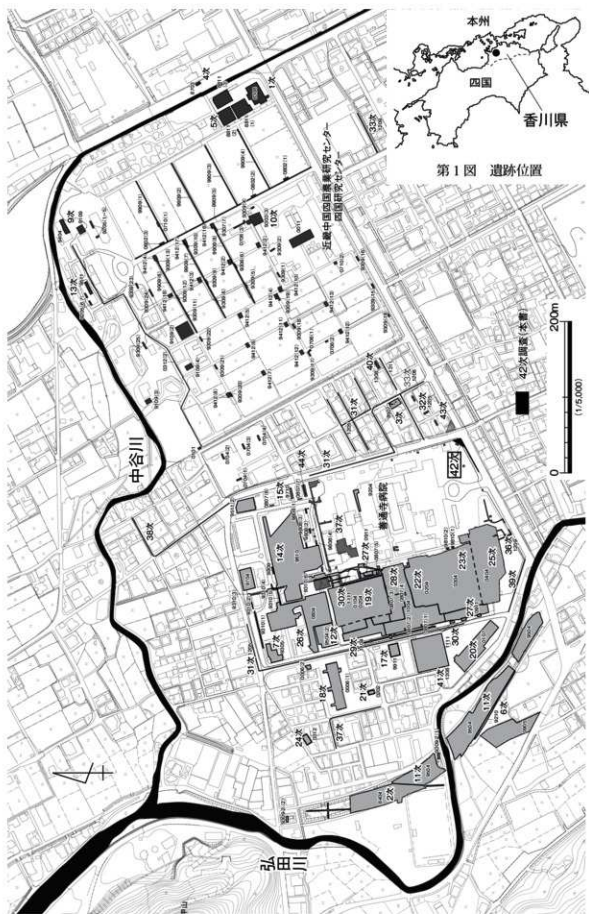
■香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 真鍋昌宏 次長 前田和也

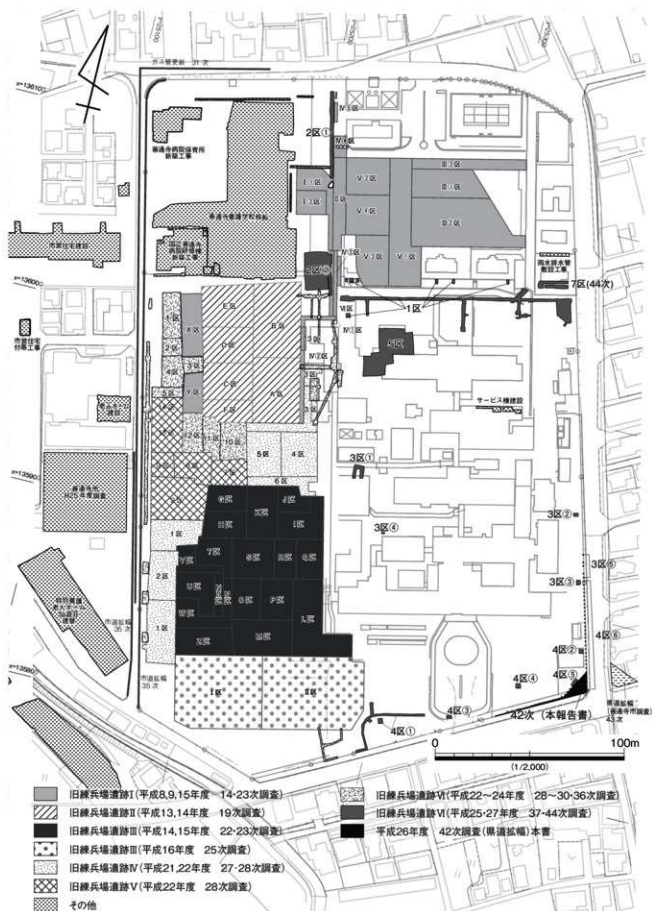
総務課 課長(兼)前田和也、主任 中川美江・寺岡仁美・丸尾麻知子・高木秀哉・岩崎昌平

資料普及課 課長 森格也、技師 真鍋貴匡

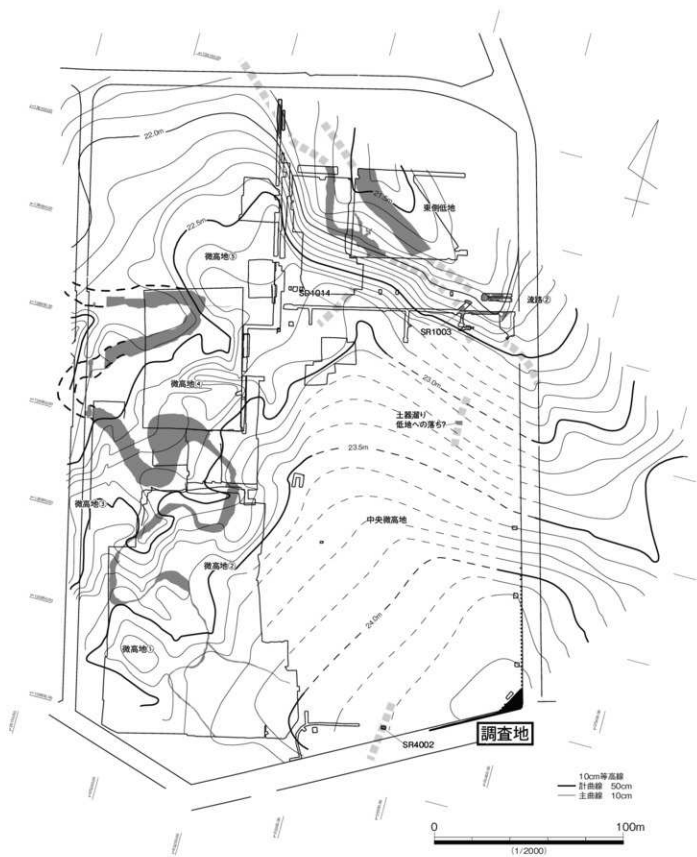
嘱託 加藤恵子・佐々木博子・竹内悦子・西本智子・牧野香織



第2図 既往調査位置



第3図 既往調査調査区



第4図 微地形復元図(弥生時代の遺構検出面)

表1 既往の調査一覧

調査番号	年度	調査回数	調査種別	調査要因	調査主体	調査面積	調査概要	文献	備考
8308	s58	1	確認調査	範囲確認調査	普通寺市教委	1200	弥生終末期の竪穴住居1棟、古代系～中世の溝を検出	1.10	仲村庵寺
8404	s59	2	本発掘調査	弘田川河川改修	普通寺市教委	3635	弥生中期～終末期の竪穴住居38棟、鏡片・銅鏝・ガラス片出土	2.11	彼ノ宗
8507	s60	3	本発掘調査	個人住宅建設	普通寺市教委	135	弥生後期後半の竪穴住居・土器棺蓋を確認	3.11	仙遊
8703	s62	4	本発掘調査	下水道建設	県教委	22	弥生中期末の竪穴住居1棟・掘立柱建物1棟を確認	11	旧練兵場
8811	s63	5	確認調査	範囲確認調査	普通寺市教委	1137	弥生中期～終末期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居を確認	4.12	仲村庵寺
9109	h3		確認調査	四国農業試験場施設整備	県教委	146	弥生時代後期の竪穴住居、弥生中期の掘立柱建物を検出	13	
9205	h4		確認調査	四国農業試験場施設整備	県教委	66	弥生後期～古墳時代竪穴住居4棟、土坑、柱穴を確認	14	
9204	h4		工事立会	普通寺病院サービス棟建設	県教委	41	古墳時代後期の竪穴住居、平安時代の溝、弥生～古墳時代の土器たまりを検出	14	
9210	h4	6	本発掘調査	弘田川河川改修	県教委	460	弥生後期～古墳時代竪穴住居多数、灰倉層中から小銅鏝片が出土	14	弘田川西岸
9305	h5	7	本発掘調査	普通寺病院保育所建設	県教委	305	弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居14棟を検出	15.28	
9309	h5		工事立会	四国農業試験場施設整備	県教委	70	全域で弥生～古代の遺構を確認	15	
9309-2	h5		確認調査	弘田川河川改修	県教委		弘田川の堆積層を確認	28	
9310	h5		工事立会	普通寺病院下水道管理設工事	県教委	100	弥生前期末の貯蔵穴2基、弥生後期の竪穴住居4棟を検出	28	
9310-2	h5		工事立会	普通寺病院下水道管理設工事	県教委	120	弥生時代後期の竪穴住居5棟、中世の溝等を確認	28	
9310-3	h5	8	本発掘調査	普通寺病院看護学校増築	県教委	150	弥生中期～終末期の竪穴住居9棟、古墳時代の掘立柱建物を確認	15.28	
9404	h6	9	本発掘調査	四国農業試験場品質管理施設建設	県教委	120	弥生中期の掘立柱建物1棟、弥生後期の竪穴住居2棟、古墳時代後期の竪穴住居1棟を確認	16.29	
9412	h6	10	本発掘調査	四国農業試験場パイプライン設置工事	県教委	100	全域で弥生～中世の遺構を確認	16.29	
9504	h7	11	本発掘調査	弘田川河川改修	県教委	6390	弥生～古墳時代の竪穴住居62棟、弥生中期の掘立柱建物を確認	33	弘田川西岸
9504-2	h7	12	本発掘調査	普通寺病院研修棟建設	県教委	690	弥生中期～終末期の竪穴住居群、弥生後期初期の掘立柱建物群を確認	17.31	
9511	h7	13	本発掘調査	四国農業試験場タンパク農産物実験棟建設	県教委	300	弥生後期の竪穴住居2棟、弥生中期の掘立柱建物1棟、古墳時代後期の溝1基を確認	17.31	
9511-2	h7		工事立会	普通寺病院備蓄倉庫建設	県教委	780	弥生後期から終末期の竪穴住居等を確認	32	
9610	h8	14	本発掘調査	普通寺病院看護学校新築	県教委	6000	弥生後期の竪穴住居・溝跡、桑里型地割坪界溝を検出	34	
9710	h9	15	本発掘調査	普通寺病院雨水管敷設工事	県教委	30	弥生～古代の旧河道を検出	32	
9704	h9		工事立会	普通寺病院水源地建設	県教委	300		32	
9809	h10	16	本発掘調査	普通寺病院看護学校増築工事	県教委	30	弥生～古代の旧河道を検出	20	
9808	h10		確認調査	確認調査	普通寺市教委	30	弥生中期～後期の柱穴群を確認	5	彼ノ宗
9909	h11		工事立会	四国農業試験場排水設備工事	県教委	800	弥生中期後半～後期の竪穴住居を検出	21.42	
9911	h11	17	工事立会	老人ホーム建設	普通寺市教委	201	旧河道から弥生中期が一括出土	21.42	
0006	h12	18	本発掘調査	市営住宅建設	普通寺市教委	1068	弥生後期竪穴住居、旧河道を検出	6	
0101	h12		工事立会	四国農業試験場西門・水路改修	県教委	122592		22	
0104	h13	19	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	3250	弥生中期～後期の竪穴住居・掘立柱建物多数、旧河道を検出	35.39	
0107	h13	20	本発掘調査	特別養護老人ホーム仙遊荘建替	普通寺市教委	1430		7.23	
0202	h13	21	本発掘調査	市営住宅付帯工事	普通寺市教委	46	弥生後期の竪穴住居3棟確認	8	
0206	h14		工事立会	普通寺病院電柱設置工事	県教委	10		24	
0204	h14	22	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	4854	弥生中期～後期の竪穴住居・掘立柱建物、古墳時代後期の竪穴住居群を検出。鏡片出土	24.44	
0504	h15	23	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	3616	弥生中期～終末期の竪穴住居72棟をはじめ、掘立柱建物等を多数確認。扇形式銅鏝片、船載内花文鏡片出土	25.44	

調査番号	年度	調査回数	調査種別	調査要因	調査主体	調査面積	調査概要	文献	備考
0312	h15	24	確認調査	公民館建設	普通寺市教委	70	弥生後期の竪穴住居、古墳時代の包含層を検出	9	
0312-2	h15		工事立会	近畿中国四国農業研究センター下水道建設	県教委	200	弥生後期の竪穴住居、旧河道を検出	25	
0404	h16	25	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	3547	弥生後期～終末期の竪穴住居、弥生中期の掘立柱建物群を検出。扁平楕円銅鐸片、船載内行花文鏡片が出土	26,41,44	
0406	h16		工事立会	近畿中国四国農業研究センター電気設備埋設	県教委	6	弥生後期竪穴住居1棟検出	26	
0804	h20	26	本発掘調査	普通寺養護学校移転整備事業	県教委	3200	弥生中期～終末期の竪穴住居多数、委里型地割りに合致する大溝を検出。鏡片が出土	42,51,52	
0905	h21		確認調査	個人住宅建設	市教委	107.5	弥生後期・古墳後期の包含層検出	43	弘田川西岸
0911	h21	27	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	840	弥生中期～終末期、古墳後期の竪穴住居、掘立柱建物を検出	47	
1004	h22	28	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	3480	弥生中期～終末期、古墳後期、古代の竪穴住居、掘立柱建物、溝を検出	47	
1104	h23	29	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	907	弥生中期～古墳前期の旧河道、古代道路状遺構を検出	46	
1111	h23	30	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	413	飛鳥時代の大型掘立柱建物を検出	46	
1205	h24	31	本発掘調査	ガス管更新	普通寺市教委		弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1205	h24	32	本発掘調査	病院駐車場設置	普通寺市教委		弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1206	h24	33	本発掘調査	ガス管新設	普通寺市教委		弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1209	h24	34	本発掘調査	ガス管更新	普通寺市教委		弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1207	h24	35	本発掘調査	市道拡幅	普通寺市教委				
1209	h24	36	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	40	中世の溝を検出	48	
1304	h25	37	本発掘調査	普通寺病院統合事業事業	県教委	1009	弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑	50	
1304	h25	38	工事立会	ガス管更新	普通寺市教委				
1307	h25	39	本発掘調査	市道拡幅	普通寺市教委				
1308	h25	40	確認調査	集会場建設	普通寺市教委				
1308	h25	41	本発掘調査	老人ホーム建設	普通寺市教委				
1311	h25		工事立会	下水道建設	普通寺市教委				
1410	h26	42	本発掘調査	県道普通寺区道路改修事業	県教委	112	古墳時代の竪穴住居、古墳時代～中世の溝		本書

既往調査文献一覧

- 尽誠学術史学会 1969 「国立病院前庭遺跡発掘調査概報」『西濃史談』1
 六車忠一 1956 「讃岐弥生式土器集成図録」『文化財協会報』特別号1 香川県文化財保護協会
 矢原高幸 1973 「普通寺市の古代文化」普通寺市
 1. 普通寺市教育委員会 「仲村庵寺発掘調査報告（旧練兵場遺跡内）」1984.3
 2. 普通寺市教育委員会 「彼ノ宗道跡～弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～」1985.3
 3. 普通寺市教育委員会 「仙道遺跡発掘調査報告書～旧練兵場遺跡仙道1地区～」1986.3
 4. 普通寺市教育委員会 「仲村庵寺・旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告書～」1989.3
 5. 普通寺市教育委員会 「山内道跡・彼ノ宗道跡発掘調査報告書～普通寺市内道跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5～」1999.3
 6. 普通寺市教育委員会 「旧練兵場遺跡 市宮西仙道町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2001.1
 7. 普通寺市教育委員会 「旧練兵場遺跡 特別養護老人ホーム仙道荘建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2002.3
 8. 普通寺市教育委員会 「普通寺市内道跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 旧練兵場遺跡」2002.3
 9. 普通寺市教育委員会 「普通寺市内道跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9 旧練兵場遺跡」2004.3
 10. 香川県教育委員会 「香川県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度」1984.12
 11. 香川県教育委員会 「香川県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度～昭和62年度」1988.3
 12. 香川県教育委員会 「香川県埋蔵文化財調査年報 昭和63年度」1989.3
 13. 香川県教育委員会 「香川県埋蔵文化財調査年報 平成3年度」1992.3
 14. 香川県教育委員会 「香川県埋蔵文化財調査年報 平成4年度」1993.3
 15. 香川県教育委員会 「香川県埋蔵文化財調査年報 平成5年度」1994.3

16. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成6年度』1995.3
17. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度』1996.3
18. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成8年度』1997.3
19. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成9年度』1999.2
20. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成10年度』2000.3
21. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成11年度』2001.3
22. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成12年度』2002.3
23. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成13年度』2003.3
24. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成14年度』2003.11
25. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成15年度』2005.3
26. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成16年度』2006.1
27. 香川県教育委員会『香川県文化財年報 平成19年度』2009.2
28. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡-平成5年度国立善通寺病院内発掘調査報告-』1994.3
29. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅱ-平成6年度四国農業試験場内発掘調査報告-』1995.3
30. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅲ-平成7年度国立善通寺病院内発掘調査報告-』1996.3
31. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅳ-平成7年度四国農業試験場内発掘調査報告-』1996.3
32. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅴ-平成9年度国立善通寺病院内発掘調査報告-』1998.3
33. 香川県教育委員会『広域基幹河川弘田川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 弘田川西岸遺跡』2008.1
34. 香川県教育委員会ほか『善通寺病院看護学校建設及び統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 旧練兵場遺跡Ⅰ』2009.2
35. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『国立善通寺病院改修事業に伴う旧練兵場遺跡発掘調査概報1-平成13年度・平成14年度上半期の発掘成果概要報告-』2003.6
36. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成8年度』1997.5
37. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成9年度』1998.6
38. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成13年度』2002.6
39. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成14年度』2003.6
40. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成15年度』2005.3
41. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成16年度』2006.10
42. 筑川龍一ほか『平成11年度旧練兵場遺跡の調査概要について-善通寺市ふれあいサロン五岳建設工事に伴う発掘調査-『善通寺市文化財保護協会報第29号』善通寺市文化財保護協会 2010.3
43. 香川県教育委員会『香川県文化財年報 平成21年度』2011.2
44. 香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 旧練兵場遺跡Ⅱ』2011.2
45. 香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 旧練兵場遺跡Ⅲ』2013.2
46. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成23年度』2012.9
47. 香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 旧練兵場遺跡Ⅳ』2014.3
48. 善通寺市教育委員会『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書14』2014.3
49. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成24年度』2013.9
50. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成25年度』2014.10
51. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成20年度』2009.8
52. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成21年度』2010.9

・遺物の所属時期は、下記の文献を参照した。

- 佐藤竜馬 1995『第5章第2節 埴井産土器の編年』『因分寺埴井遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊 2000『第5章第1節 高松平野と周辺地域における中世土器の編年』『空港跡地遺跡Ⅳ』
空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊
 2016『讃岐における古代-中世土器編年をめぐる基礎作業(1)』9世紀後半-11世紀前半の伊勢器群
『香川県埋蔵文化財センター年報』平成26年度
- 信里芳紀 2002『第V章第1節 小谷窪跡出土須恵器の編年』『小谷窪跡-塚谷古墳』
高松東フナトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
 2011『弥生中期後半から古墳時代初期の土器編年』『旧練兵場遺跡Ⅱ』19次調査
独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊
 2014『讃岐地域における古墳時代前期の土器編年』『古式土師器の編年の研究』一四国局の古墳時代前期の土器群相一

第2章 調査成果

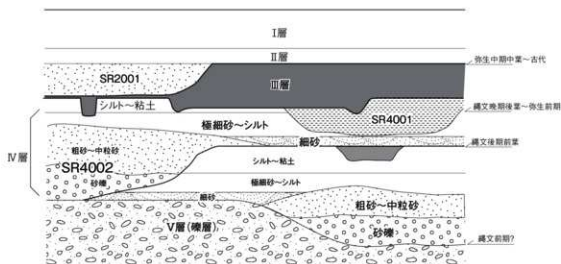
第1節 調査区の基本層序

既往調査の概要については『旧練兵場遺跡Ⅱ』（香川県教育委員会 2011）において詳述されており、割愛する。ここでは調査区の位置と基本層序について確認しておきたい。これまで実施された旧練兵場遺跡の調査範囲は中央微高地よりやや標高の低い東側低地と、西側の流路によって細分された微高地上に位置する（第4図）。対して本調査地は中央微高地と区分した南東から派生する尾根の最高所に位置し、調査面積こそ少ないが、中央微高地上での面的な調査である。

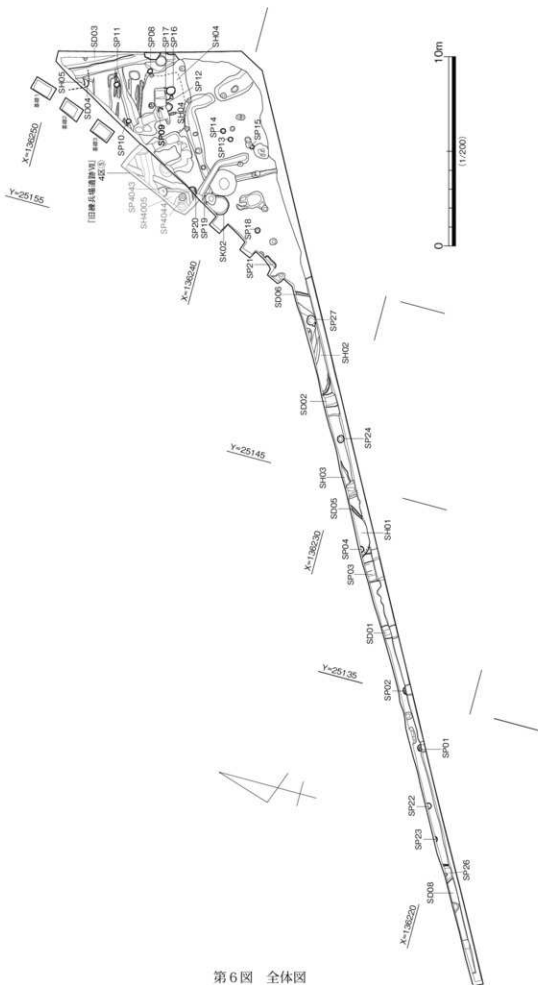
基本層序（第5図）は以下に示した通りである。調査区断面及び平面の観察から本調査地は、全域に基盤層Ⅳ層が広がることが明らかとなった。Ⅳ層の最高所は標高 24.4m、攪乱底面の標高 23.3m 付近でもⅣ層が確認でき、約 1.0 m と厚くⅣ層が堆積していることがわかる。基盤層下層であるⅤ層の礫層は全く確認できない。基盤層の標高は東側が標高 24.35 m、西側が標高 24.25 m を測り、東側が若干高い。さらに、遺構の残存状況を合わせて確認すると、東に位置する遺構ほど削平の度合いが高く、最も東に位置する SH04 は主柱穴とわずかに貼床が確認できるだけであるが、SH02 以西の竪穴建物は埋土が残存しており、東と西の遺構の残存度に差がみられる。以上より、数値以上に西と東の高低差があったものが、削平を受けて平坦化したものと考えられる。

基本層序

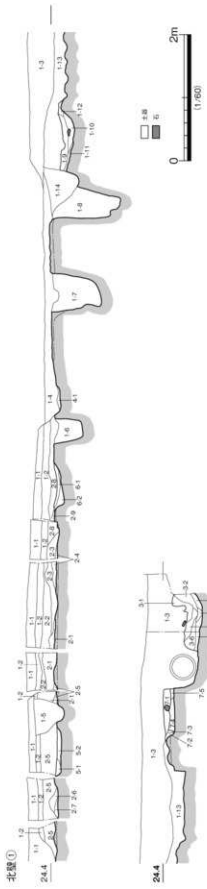
- I 層 現代の盛土及び攪乱土
- II 層 中世から近世の耕作土・遺構埋没土（灰色シルト）
- III 層 弥生時代中期から古代の遺構埋没土（黒褐色シルト～粘土）
- IV - 1 層 縄文時代後期～晩期（黄灰色細粒砂～シルト）
- IV - 2 層 縄文前期?～縄文後期（黄褐色粗砂～シルト）
- V 層 砂礫層



第5図 旧練兵場遺跡Ⅳ層下位の堆積状況の模式

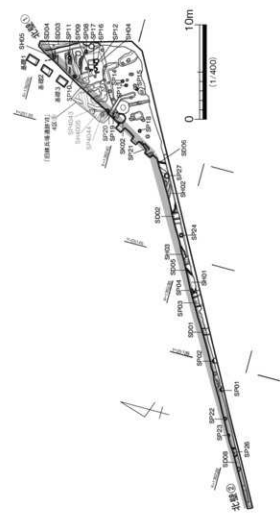


第6図 全体図



調査区北壁①断面

- 1.1 1.13 調査区北壁①断面
- 1.2 1.13 調査区北壁①断面
- 1.3 1.13 調査区北壁①断面
- 1.4 1.13 調査区北壁①断面
- 1.5 1.13 調査区北壁①断面
- 1.6 1.13 調査区北壁①断面
- 1.7 1.13 調査区北壁①断面
- 1.8 1.13 調査区北壁①断面
- 1.9 1.13 調査区北壁①断面
- 1.10 1.13 調査区北壁①断面
- 1.11 1.13 調査区北壁①断面
- 1.12 1.13 調査区北壁①断面
- 1.13 1.13 調査区北壁①断面
- 1.14 1.13 調査区北壁①断面



第7図 調査区北壁①断面

第2節 調査の成果

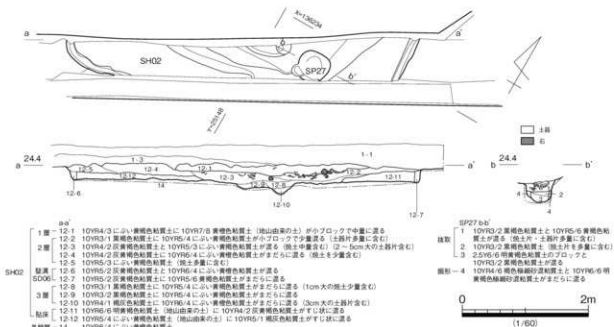
SH02（第9図～第13図）

遺構 調査区東側で検出した一辺5mの平面プラン方形の竪穴建物である。貼床は厚さが15cmあり、基盤層Ⅳ層由来の黄色シルトを多量に用いて、夾雑物をあまり含まない。中央部分は貼床が施されず、周囲がベッド状に一段高い。主柱穴はSP27の一基のみ確認している。

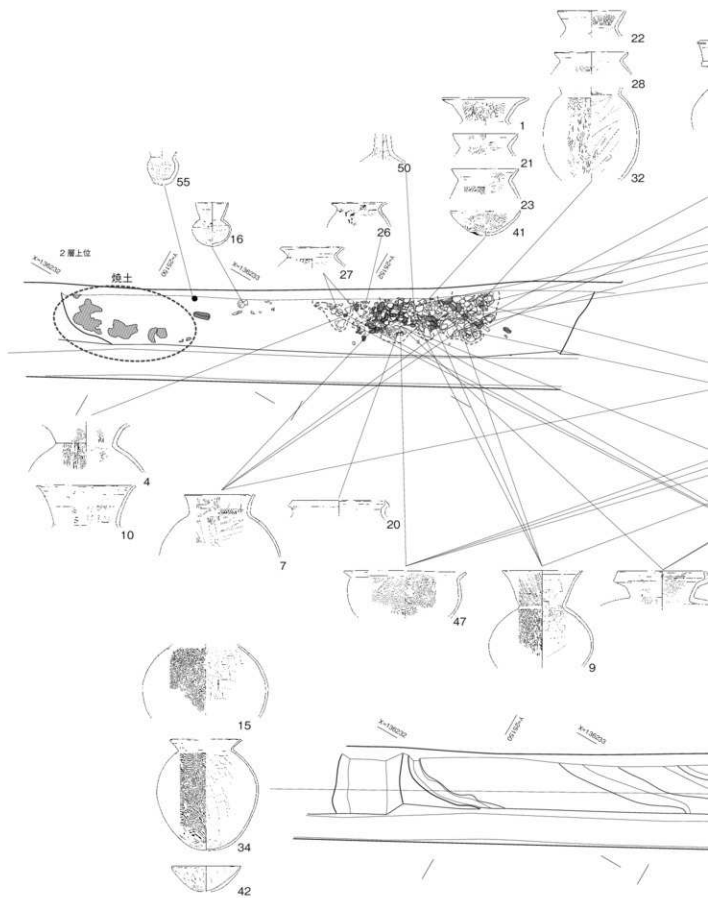
竪穴建物の東側を中心に、埋土2層の上位から主柱穴の抜取にかけて多量の土器が出土し、西側は焼土（約660g）が集中していた。土器群と床面の間には10cmほどの間層（3層）が確認できるが、2層上位から主柱穴（SP27）の抜取まで土器群が連続していることから、埋戻しの際に投棄されたものと考えられる。また1層に基盤層由来の黄色シルトが多量に混じっており、埋戻しの最終に周囲の基盤層Ⅳ層を用いて埋め戻されたものと考えられる。以上の整理から、2層の土器群はSH02廃絶後の埋め戻しの過程で、短期間の内に廃棄された遺物と考えられる。

遺物 前述の通り、廃絶時に短期間の内に廃棄された土器群である。弥生土器が数点、古式土師器は甕・鉢・広口壺・直口壺・高杯・二重口緑壺・複合口緑壺・ミニチュア土器がある。

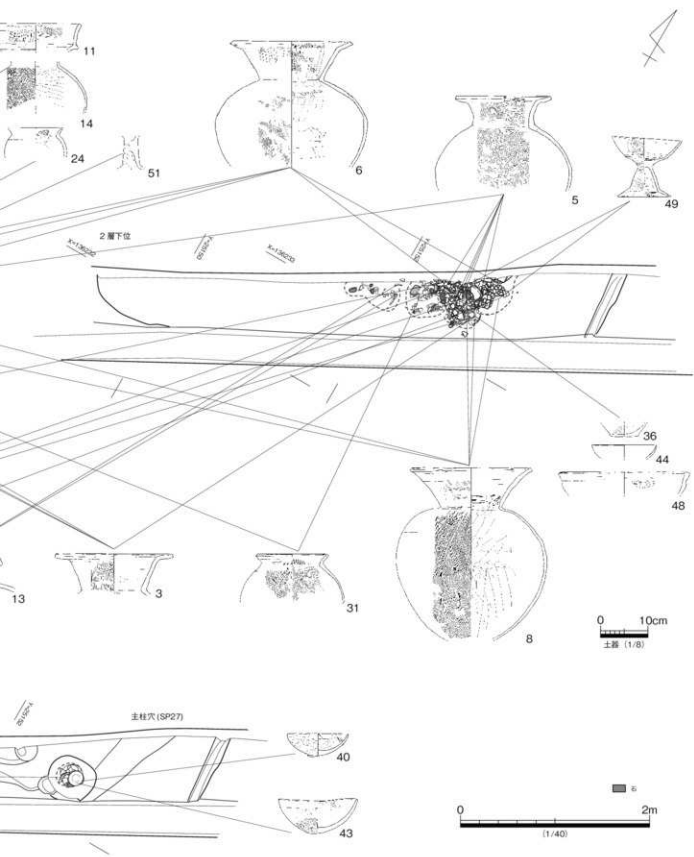
1～6の広口壺は、逆ハの字に開く頸部に水平方向とやや斜め上方の口縁部をもち、口頸部の屈曲は明瞭である。口縁部のヘラミガキは文様状に施されている。胴部は中位に最大径をもつ5、肩が張る6がある。3・5・6は、口縁部は中位で反転し内湾する。6は図化していないが、焼成によると考えられる器壁表面の厚さ1mmほどが広範囲にわたり剥落している。7～10の直口壺は、口縁部が短い7と大きく外開きになる8～10がある。また、6・9は外面にヘラミガキが文様状に施される。胴部は最大径を中位にもつ9と肩が張る8がある。11・12の二重口緑壺は、11の疑似口縁が明瞭に観察できる。また、外面にヘラミガキが文様状に施される。16の小型丸底壺は、胴部最大径を中位よりやや上にもち、口縁部は内湾気味に立ち上がる。21～34の甕は、やや間延びした口縁部をもち、胴部が残存するものは、最大径を中位もしくは中位よりやや上にもつものがあり、完全には球形化していない。33の甕胴部には焼成後に外側から穿孔がある。38～47の鉢は、口径が10cm前後に対し高さが6cm前後の（38・



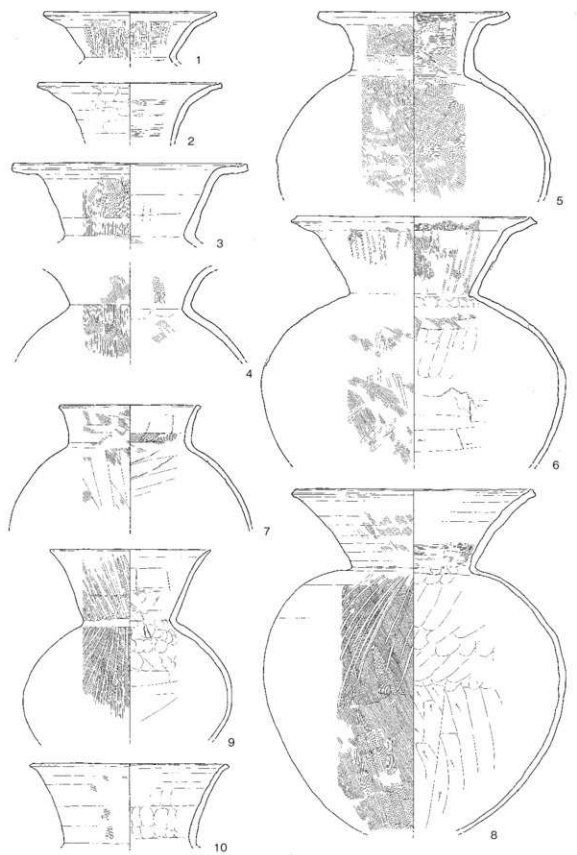
第9図 SH02・SP27 平面図・断面図



第10図 SHO

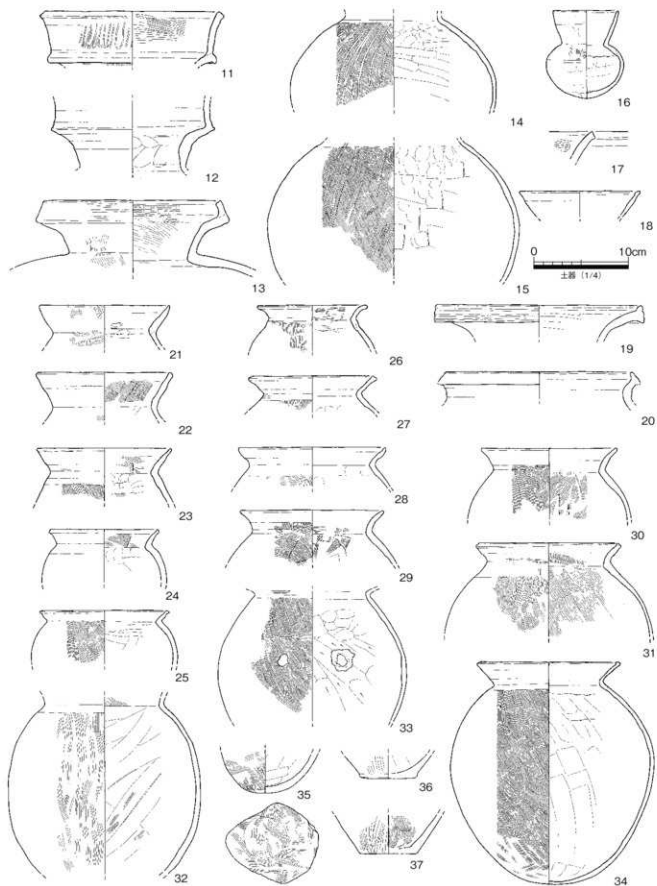


2 遺物出土状況

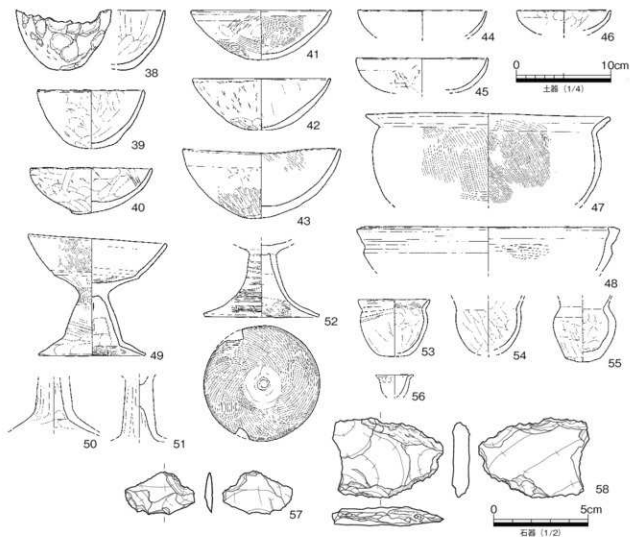


0 10cm
土器 (1/4)

第 11 図 SH02 出土遺物 1



第12図 SHO2 出土遺物2



第13図 SH02出土遺物3

39)、口径15cm前後に対し高さが6cm前後の(41～43)、口径が11cm前後に対し高さが3cm前後の(40・44～46)があり、バリエーションにまとまりがみられる。また、47の鉢は口縁部が外反するタイプである。38の鉢は、焼成破裂によって器壁外面が、ウロコ状に剥落している(写真図版12)。SH02支柱穴SP27から出土しているが、破片の内一点がSP27より13mほど東のSP12から出土した遺物と接合する資料があることから、周辺で焼成された可能性が考えられる。また遺物が別遺構の資料と接合することから、取上時等の混乱も考え調査過程を検討したが、その可能性は低いと考えられる。焼成破損品は、6の直口壺と38の2点ある。49の高杯は、内湾する杯部にやや中位が膨らむ脚柱部をもつ。52の高杯は、胎土が砂粒をほとんど含まず、焼成も硬く焼きしまっている。外面は丁寧なナデの後、横方向のヘラミガキが多重にめぐる。また、内面下三分の一にハケ目が丁寧に施される。この種の特徴的な調整は、山陰地方に多く見られる。53～56は、ミニチュア土器で図化した以外にも数個体確認できる。器壁はいずれも指オサエが残り、器面の凹凸が目立つ。57と58はサヌカイト製の剥片、19・20の壺と48の鉢は弥生時代中期後半新相から後期前半の資料であり、他の遺物群とは明らかな時期差が認められることから混入品考えられる。今回の調査では弥生時代の明確な遺構は確認できていないが、周辺の未調査部分にその存在が示唆される。

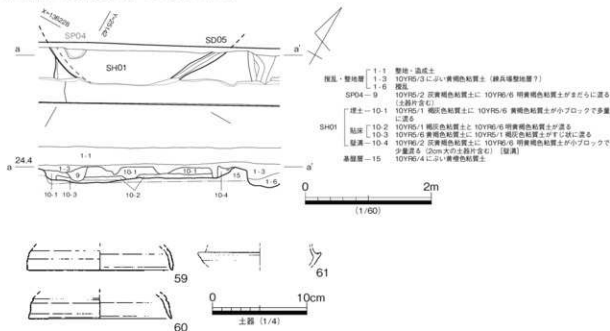
時期 2層より出土した土器群の特徴より古墳時代前期前半でも新しい一群と考えられる。

SH01 (第14図)

遺構 調査区中央で検出した竪穴建物である。平面プランは鈍角気味に屈曲するコーナー部分を検出したことから、方形プランになると考えられる。建物の大部分が調査区北側にあり、その規模・構造についての詳細は不明である。埋土は単層で貼床は10cmほどの厚みがあり、基盤層IV層の黄褐色シルトとよく似る。遺構の重複関係は、SP04に先行する。

土器 出土遺物は須恵器杯蓋(59・60)、蓋杯(61)がある。59・60の蓋は、口径15cm前後、肩部に沈線があり、端部内面には段状の凹面を有する。61の蓋杯は、受部径12.8cmを測り、立ち上りの端部は欠損する。

時期 竪穴建物埋土および貼床から出土した59～61の特徴から、古墳時代後期後半(TK10型式期新段階)に廃絶したものと考えられる。



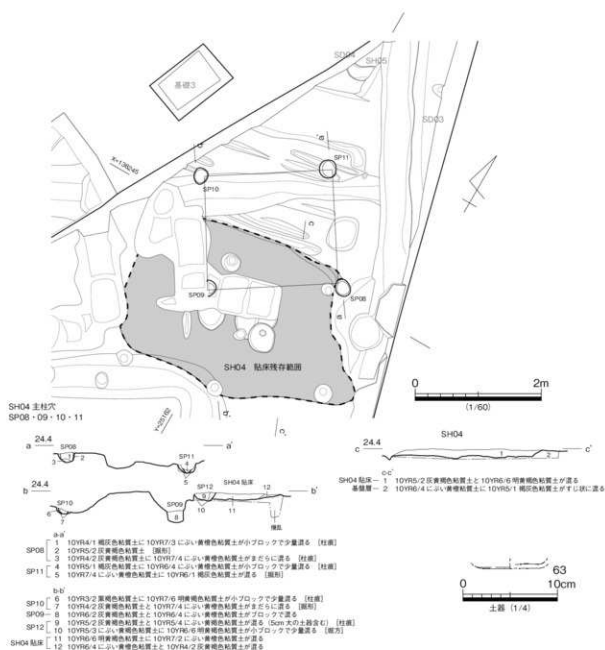
第14図 SH01 平面図・断面図、出土遺物

SH03 (第15図)

遺構 調査区中央で検出した竪穴建物である。著しい削平によって、平面ではわずかな落ち込みを検出したに過ぎない。断面観察より、西側と東側を攪乱で破壊されているものの、基盤層IV層由来の黄色シルトが混じった厚さ20cmほどの層(13-2層)を北壁で確認でき、またそれを切り込む形で黒褐色の粘質土(13-1層)を確認した。根拠としてはやや弱い。黄褐色シルトが混じった層(13-2層)を貼床、さらにその層を切り込む黒褐色粘質土の層(13-1層)は貼床が施されなかった箇所に堆積した埋土と判断した。またSH03の東側のSD02およびSH02、西側のSH01にもSH03に関係する層位を確認できないことから、平面図で示した範囲に収まる4m～5mの大きさと考えられる。落ち込み部分がやや直線気味になることから平面プランは方形の可能性はある。遺構の重複関係はSP24に先行する。

遺物 出土遺物は細片が多く、時期を示す遺物は62の須恵器杯のみである。丁寧な回転ヘラ削りが施され、杯の底部と考えられる。

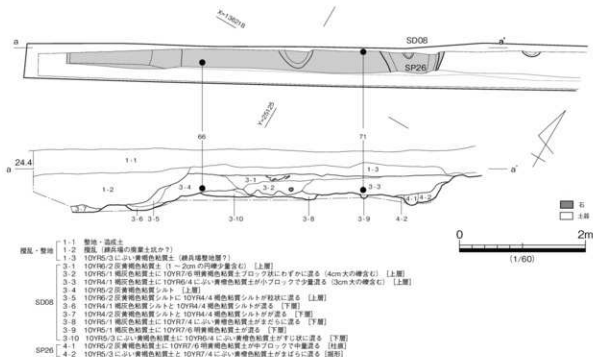
時期 遺物が須恵器杯(62)のみで時期比定の根拠に乏しいが、古墳時代後期に廃絶したものと考えておきたい。



第 17 図 SH04 平面図・断面図、出土遺物

遺物 出土遺物は貼床から出土した須恵器杯 (63) のみである。内面に火燂の痕跡がある。回転ヘラ切り後に丁寧なナデが施されている。器壁はやや薄く、底部から口縁部への立ち上がりは、スムーズに連続している。

時期 出土遺物が一点のみで根拠に乏しいが、底部外縁の立ち上りの特徴から 8 世紀代の資料と考えられる。また、建物の主軸が N31°W となっていることも、当該期の条里型地割に規制された可能性がある。ただし、堅穴建物の埋土がすべて削平され、貼床が攪乱土の直下で検出していることから、混入の可能性を排除できないことを断っておきたい。



第18図 SD08平面図・断面図

SD08 (第18図・第19図)

遺構 調査区西側で検出した大溝である。西側三分の一は攪乱によってほとんど破壊されている。断面観察より大溝の西肩は調査区外のさらに西側にあるものと推定される。規模は幅6m以上、深さ約70cmを測り、断面形状は逆台形を呈し、底面の形状は凹凸がある。大ききは南北方向の軸をとるが、詳しい軸や流下方向は明らかでない。遺構の重複関係はSP26より後出する。

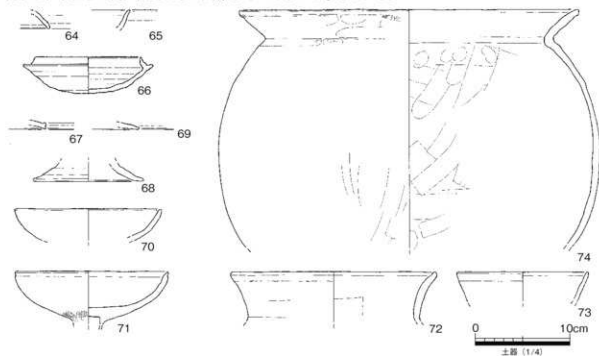
埋土は大別3層ある。下層は基盤層に由来する黄色シルトが変色したグライ化した層である。中層は褐色系の粘質土に基盤層に由来する黄色シルトが微細ブロックで混じる。大部分の遺物は中層下位からの出土である。上層は埋土のしまりがあまりなく、灰色味が強い。また土器74が中層と上層の層境に横倒し状態にあったことも確認している。以上観察より上層は中層が完全に埋没した後の凹みにたまった最終埋没層と考えられる。

微地形の観察より微高地の縁辺部に位置することがわかる。断面観察より下層に一部グライ化した層が確認でき、一定の水量があったと推測できるが、顕著な流水痕跡は確認できていない。

土器 図化しえない資料に土師質土器足釜の小片が最上層掘削中に出土している。出土遺物は中層出土遺物に、杯蓋(64)、杯(65・66・73)、高杯(67~71)、甕(72)、上層出土遺物に杯(73)、甕(74)がある。66の須恵器蓋杯は、口径11.2cmを測り、底面二分の一は回転ヘラ削りが施される。立ち上がりはやや高く、様相1(信里2002)に相当する。67は、端部をわずかに拡張させていることなどから須恵器高杯の脚部と判断した。70・71の土師器高杯は、70の杯部は端部を丸くおさめ、71は端部内外面に強いヨコナデが施されている。また71の杯外面底部には逆凹面の剥離の痕跡があり、杯部と脚部の粘土の連続性がみられないことから、杯部と脚部をそれぞれ別作りした後に接合したのと考えられる。72の土師器甕は、外反する口縁部に端部内面には沈線状の窪みがある。74の土師器甕は大型のもので胴部中位に最大径がある。

時期 中層出土遺物の土師器高杯(70・71)及び須恵器蓋杯(66)より7世紀前半(様相1)に埋没

が始まり、8世紀後半まで開放状態であったと考えられる。また、図化しえないが土師質土器足釜の存在から、中世まで浅い窪地として残存していたものと考えられる。



第19図 SD08 出土遺物

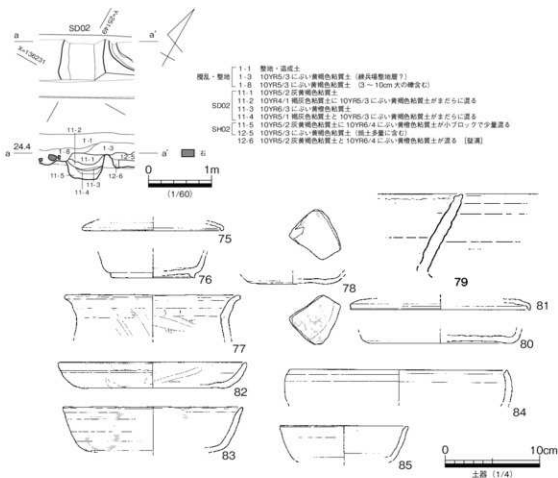
SD02 (第20図)

遺構 調査区中央で検出した南北に軸をとる溝である。幅1.0m、検出面からの深さ70cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は大別3層ある。下層は、ラミナ状の堆積と黄色シルトの小ブロックが混じり、機能時の堆積層と考えられる。遺物は3層で取上げている。中層は黒褐色系の埋土を呈し下層に類似するブロックが多く混じり、焼土塊を含む。この焼土塊は、遺構の重複関係にあるSH02埋土西側に多く含まれており、SD02埋土にSH02埋土が用いられた結果、焼土塊が混入したものと考えられる。以上より中層は埋戻し土と考えられる。遺物は2層で取上げている。上層は埋戻後の堆積層と考えられ、灰色味が強い。遺物は1層で取上げている。

土器 上層出土遺物は、蓋(75)、杯(76、78)、甕(77)がある。75の須恵器蓋は、短くクチバシ状に折込み突出させ、端部はやや丸い。76の須恵器杯は、高台周辺は丁寧な回転ナデが施され、逆台形の高台をもつ。78の土師器杯は、磨減著しいが、内外面に赤色顔料の痕跡がわずかに確認できる。77の土師器甕は、内面の頸部直下までヘラ削りが施される。

中層出土遺物は、甕(79)、蓋(81)、皿(82)、杯(80・83)、鉢(84)がある。79の須恵器甕は、直線的に伸びる口縁部に、端部上面に凹面を作り出す。80と81は、器種は異なるものの焼成や色調、自然釉の付着具合が非常によく似る。80の杯は、底面に自然釉がつく、内面底部は回転ナデの後不定方向のナデが施される。83の土師器杯は、口縁部端部は内面に横ナデが施され、面をもっている。内外面に赤色顔料がわずかに確認できる。78と合わせて赤色顔料が確認できることから、既に旧練兵場遺跡で確認されている土師器焼成坑出土遺物と比較検討を行った。観察の結果、素地の胎土は類似している以外は、器壁の厚さが土師器焼成坑出土資材より半分(6mm)ほどあること、口径が一回り大きいことなど、相違点がある。

下層出土の須恵器杯(85)は、底部から内湾気味に立ち上がり、端部は外反気味になる。
 時期 各層出土土器には顕著な時期差は認められない。機能時の堆積層である下層の遺物、埋戻し土の中層出土遺物より、8世紀中葉(Ⅱ期新)(佐藤 2016)に埋没したものと考えられる。



第20図 SD02平面図・断面図、出土遺物

SD03 (第21図)

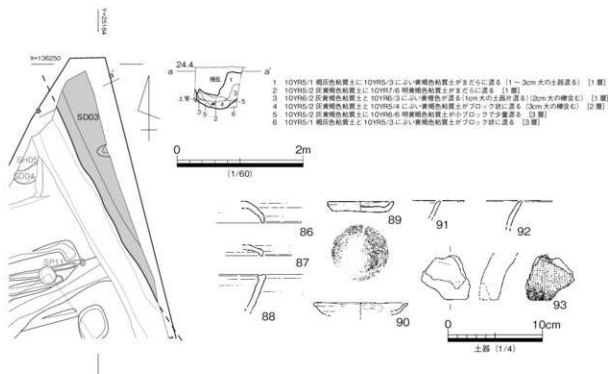
遺構 調査区東端で検出した大溝である。SD03は真北から西へ約26°傾き、条里型地割の坪境に一致する。規模は幅60cm以上、深さ50cmを測る。埋設管によってほとんど破壊されており、遺構の残存度は低い。埋土は大きく上層と下層に分けられ、遺物取上げ単位の1層が上層、2層3層が下層に位置づけられる。下層は基盤層由来の土が混じり、灰褐色の粘質土が主体となる。上層は細砂が主体となる。

SD03を北に延伸すると、37次調査の南北溝SR1002、14次調査のSD08があり、条里地割の坪境に一致する一連の南北溝と考えられる。

土器 出土遺物は、蓋(86・87)、甕(88)、皿(89・90)、黒色土器碗(91)、甕(92)、丸瓦(93)がある。86の杯蓋は、古墳時代後期の所産とみられる。87の蓋は、端部は垂直に短く屈曲する。89の土師質土器皿は、底部を糸切りによって切り離されている。口縁部は短い。90の土師質土器皿は、口縁部下位は内湾し、上位から反転して外反し、端部は丸くおさめる。91の黒色土器碗は、端部しか残存していないが、黒化処理は内面のみである。92の甕は、磨滅著しいが、やや薄手の作りで、古墳時代後期以後の甕の口縁部とみられる。93の丸瓦は、内面に布目の圧痕が残り、外面は板ナデ調整されている。

時期 遺物は細片が多くまた混入が多いが、下層から出土した土師質土器皿(89・90)の口縁部の形

態から、13世紀前半には埋没したものと考えられる。



第21図 SD03 平面図・断面図、出土遺物

SK02 (第22図)

遺構 調査区東側で検出した土坑である。南北12m、東西1.0mの南北にやや長い楕円形プラン、深さ20cmを測る。埋土は上下2層あり、上層は褐色が強い埋土であるが、下層は基盤層由来の黄色シルトがブロック状にまじる。

土器 出土遺物は極細片であり、土器高杯(94)も残存部分は僅かである。脚端部でほぼ水平に裾を広げ、端部は丸く収める。

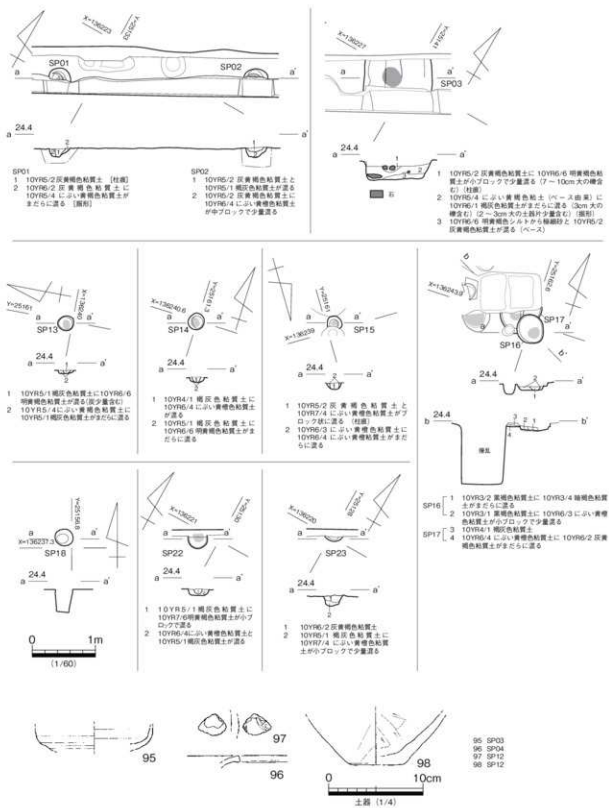
時期 94の遺物のみであるが、古墳時代後期の可能性がある。



第22図 SK02 平面図・断面図、出土遺物

柱穴 (第23図)

検出した柱穴は狭小な調査区であったことから、掘立柱建物等の建物を復元しえなかった。ここでは、今後の調査の進展によって建物の組み合わせ等が判明することも考慮し、断面図と特徴的な遺物を掲載し、報告しておく。SP03は調査区中央で検出した掘形が方形の柱穴で、掘形は一辺1m、柱痕は直径30cmを検出している。断面の観察からは、上層がほとんど削平されており、柱のあたり部分しか残存

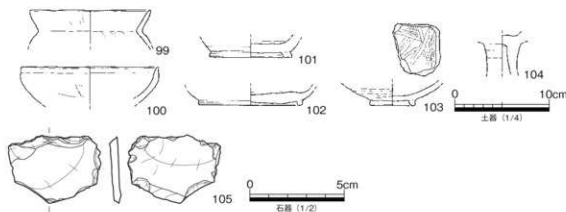


第 23 図 柱穴平面図・断面図、出土遺物

していない。柱穴掘形埋土は基盤層Ⅳ層に由来する黄色シルトが多量に混じり、基盤層との区別が困難であった。遺物は柱痕から須恵器杯(95)1点のみで、杯底部として復元したが、蓋の可能性も残される。時期は古墳時代終末期と考えられる。SP04は調査区中央で検出した柱穴で、遺構の重複関係からSH01より後出する。土師器甕(96)が出土している。SP12は調査区東側で検出した柱穴である。遺構の重複関係はSH04よりSP12が後出し、SP16・SP17も同様である。SH04の時期の評価が難しいところであるが、SH04は本報告では8世紀代と考えている。SP12から出土した遺物は97・98があり、97は器壁に沈線による弧状の文様がある。98は器壁が厚くしっかりとした平底の特徴より弥生後期ころの時期に相当する。しかし古墳時代前期前半の資料であるSP27出土資料(6)と遺構間接合する遺物があることから、SP12の資料の大半は混入の可能性が高く、遺構の重複関係より8世紀以降の時期と考えられる。

包含層(第24図)

包含層出土遺物は、特徴的なものを抽出し報告する。99の土師器壺は緩い屈曲にやや内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。古墳時代前期の所産と考えられる。100の土師器高杯は調査区西側のSD08を切り込む攪乱を精査していた際の出土遺物で、SD08から出土した遺物に類似した遺物があることから、本来はSD08の遺物とみられる。内湾気味に立ち上がる杯部に、端部内面は強いヨコナデが施される。古墳時代後期の所産と考えられる。101の壺は台形を呈する高台をもち、高台の貼付けは丁寧である。102の杯は、底部に回転ナデが施される。101・102は高台の特徴から、8世紀前半の所産と考えられる。103の西村型須恵器碗は、高台径5cmほど、体部内面は不定方向のヘラミガキが施される。104は須恵器高杯である。スカシは残存範囲では確認できない。105はサヌカイト製の剝片である。



第24図 包含層出土遺物

まとめ

調査成果

調査対象となった場所は中央微高地の標高 24m 付近に位置し、これまで調査対象地とならなかった中央微高地の高所に位置する。狭小な調査区であったにも関わらず、堅穴建物を 5 棟確認でき、微高地上の居住域の広がりを一部であるがおさえることができたといえる。以下に、まとめとして調査区内の遺構を時期別に示しておく。大きくは古墳時代（前期・後期）、古代（7世紀）、古代（8世紀）、中世（13世紀）の遺構を確認した。しかしながら、遺構の残存度は悪く、微高地上に位置していることから他所よりも強い削平を受けたものと考えられる。また、旧練兵場遺跡内で多数を占める弥生時代の居住関連遺構は本調査地では全く確認できなかったが、SH02 埋土に混入した弥生時代後期前半の遺物が確認できることから、近隣に遺構が存在している可能性が示唆される。

遺構変遷（第 25 図）

古墳時代前期

調査区中央に堅穴建物（SH02）が建てられる。建物の軸は N 2° W でほぼ真北を指向する。廃絶に伴う土器群が廃棄されており、良好な一括資料である。また、広口壺（6）と鉢（38）に焼成破裂による器壁の破損がある。鉢（38）については接合資料が東へ約 13 m 離れた SP12 出土資料と接合する土器片がある。

古墳時代後期

調査区中央および東端に堅穴建物（SH01・SH03・SH05）が建てられる。調査区中央の一群は、N40° W 前後を測り、東端の建物は N23° W を測る。詳細な時期については、SH03・SH05 は保留せざるをえないが、SH01 は貼床および埋土から出土した遺物より古墳時代後期後半に位置づけられる。

古代（7世紀）

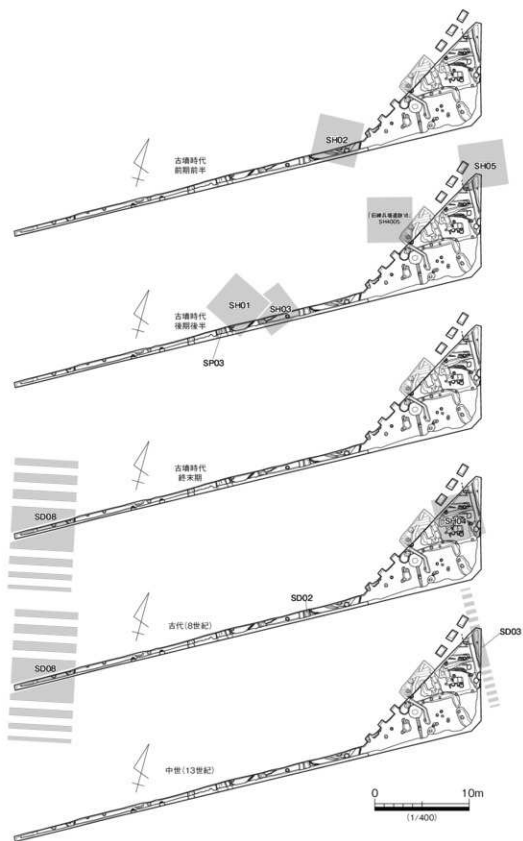
調査区の西端で検出した大溝（SD08）が開削される。7世紀前半（様相 1）の遺物が主に出土しており、同時期の同様な遺構に、「旧練兵場遺跡Ⅲ～Ⅵ」で報告されている SD0005 がある。SD08 と SD0005 は、緩やかに下る皿状の断面形状や出土遺物の時期幅など共通する点がみられる。遺構の類似性からみれば、SD08 は灌漑水路の可能性がある。

古代（8世紀）

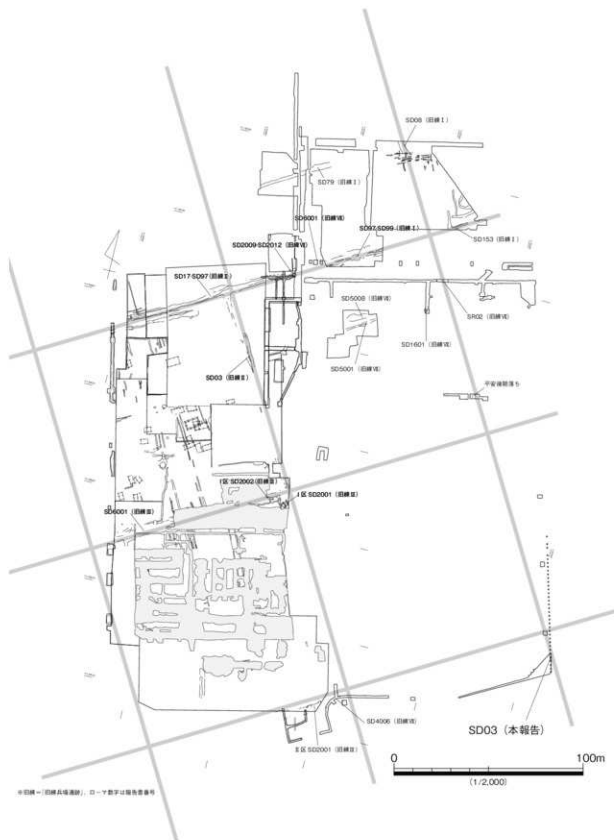
堅穴建物（SH04）が建てられる。時期比定の根拠は弱いですが、旧練兵場遺跡内でも 8世紀前葉まで堅穴建物がみられることから、著しく逸脱するものではない。8世紀中葉（II期新）埋没の溝（SD02）が機能している。溝（SD02）から出土した土師器杯（78・83）は器壁の内外面に赤色顔料が塗布されている。しかし旧練兵場遺跡で既に報告されている土師器焼成土坑から出土した遺物とは、器壁の厚さや口径が異なる。

中世（13世紀）

調査区の東端に大溝（SD03）が開削される。旧練兵場遺跡で確認されている条里型地割に合致する大溝の分布を確認すると、「旧練兵場遺跡 I」SD08、「旧練兵場遺跡Ⅵ」SR1002、デイサービス棟増設の平安後期の溝が大溝（SD03）の延長線上で確認でき、条里型地割の南北の坪境に合致する一連の南北溝と考えられる（第 26 図）。出土遺物より 13世紀前半には埋没する。



第25図 遺構変遷



第 26 図 中世の条里型地割と主要溝群

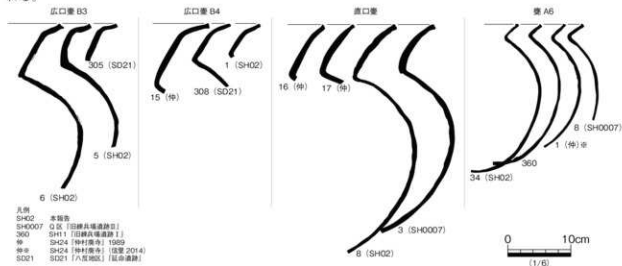
SH02 出土土器について

SH02の2層より出土した土器の時期を古式土師器の編年(信里2014)に基づき考えておきたい。出土した多量の古式土師器は、その出土状況や断面図の観察より、SH02の埋め戻しと同時に廃棄され、上層を周囲の基盤層IV層を用いて埋め戻された状況を確認している。SH02出土土器の組成は、甕は広口・直口・二重口縁・複合口縁・小型丸底、甕は口縁部や調整から数器種、鉢は口径・器高・口縁部形態より4器種、ミニチュア土器、高杯がある。狭小な調査区であったが、ほぼすべての器種が揃い各器形のバリエーションも見られる。ただし、第11図の19・20の甕のみ凹線文があり、明らかな混入資料と判断される遺物もわずかだがある。

まず基準となる甕(34)の特徴を整理し、対象となる時期を確認しておきたい。甕(34)の特徴は、口縁部は発達し上方に大きく突出し、口縁端部は摘み上げられている。胴部の最大径は中位より上でやや肩が張り、底部は完全に丸底となっている。調整は外面全面にハケ調整、内面は下半三分の二がへら削り、上三分の一はナデが施されている。以上の諸特徴より、A6型式(信里2014)に相当するものと考えられる。SH02より出土している他の甕の形状をみても、逸脱するものではない。

次に同時期ないしは前後する時期とされるQ区SH0007「旧練兵場遺跡Ⅲ」、SH24仲村廃寺、SD21延命遺跡「八反地区」、SH11「旧練兵場遺跡Ⅰ」出土遺物を対象として、広口壺・直口壺・甕の共通項を確認しておきたい。第27図は断面図を抽出し、横並びに図示した。甕はSH11出土の360に胴部最大径の位置やそれに伴う肩の張、底部の丸みなど非常に近い。口縁部はいずれの資料にも類似している。前述のA6型式に収まるものである。直口壺は比較対象となる同時期資料が乏しいが、口縁部の形状にSH0007出土の3に近い。また胴部の形態は、直口壺・広口壺ともに同時期の資料群より肩が張る。広口壺は、直線的な頸部とやや外反する頸部のものがあり、内湾する口縁部と直線的なものがある。端部は上方に摘み上げられる。延命遺跡SD21出土の305より内湾の度合いが全体的に強い。広口壺はそれぞれ口縁部が内湾する形態である3・5・6はB3型式と直線的な形態である1・2はB4型式に収まるものと考えられる。

以上の整理より、甕はA6型式、広口壺はB3型式とB4型式があることがわかった。これらの土器群は堅穴建物の埋め戻しと同時に廃棄され、上層に基盤層IV層に由来する土で埋め戻されている状況から、一時期に廃棄された土器群と考えられる。これらの型式の組み合わせから古墳前期3期に相当すると考えられる。



第27図 広口壺・直口壺・甕断面比較

第2表 旧練兵場遺跡出土土器観察表(3)

遺物番号	遺物名称	出土位置・層位	種類	調整		色調		胎土			底径 (cm)	残存率	備考	
				外面	内面	外部	内部	石質・長石	赤色粘土質	砂粒				口径 (cm)
61	SH01	一段下層(筋床・木心)	須臾器	回転ナズ	回転ナズ	N6/灰	N6/灰					1/8 未調		
62	SH03	一段下層(筋床・木心)	須臾器	回転ナズ	回転ナズ	N5/灰	N5/灰					1/8 未調		
63	SH04	筋床	須臾器	回転ナズ	回転ナズ	N6/灰	N6/灰					1/8 未調	内・火だすき	
64	SD08	上層	須臾器	回転ナズ	回転ナズ	N6/灰	N6/灰					1/8 未調		
65	SD08	上層	須臾器	回転ナズ	回転ナズ	N5/灰	N5/灰					1/8 未調		
66	SD08	上層	須臾器	回転ナズ・回転ナズ 向ナズ	回転ナズ後不定方 向ナズ	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白				11.1	3.9	2.8	
67	SD08	最下層	須臾器	回転ナズ	回転ナズ	N7/灰白	N7/灰白					1/8 未調		
68	SD08	上層	土師器	高杯	高杯	5YR6.6黄	5YR6.6黄				11.5	1.8	1/8 未調	
69	SD08	上層	土師器	高杯	高杯	10YR8.3浅黄	10YR8.3浅黄					15.4	1/8	
70	SD08	上層	土師器	高杯	高杯	5YR6.6黄	5YR6.6黄					16.1	2.8	外・凹縁1条
71	SD08	上層	土師器	高杯	高杯	10YR6.3に赤い黄	10YR6.3に赤い黄					21.5	1/8 未調	
73	SD08	上層	土師器	杯	ナズ	10YR7.3に赤い黄	10YR7.3に赤い黄					13.8	1/8 未調	
74	SD08	上層	須臾器	高杯	高杯	7.5YR6.4に赤い黄	7.5YR6.4に赤い黄					35.4	2.8	
75	SD02	1層	須臾器	高杯	高杯	5B5/1青灰	5B5/1青灰					14.7	1/8	
76	SD02	1層	須臾器	高杯	高杯	N6/灰	N6/灰						1/8	胎付高台
77	SD02	1層	土師器	高杯	高杯	7.5YR6.3浅黄	7.5YR6.3浅黄					18.2	1/8	内外・赤色顔料
78	SD02	1層	土師器	高杯	高杯	N5/灰	N5/灰						1/8 未調	
79	SD02	2層	須臾器	高杯	高杯	2.5Y7.2灰黄	2.5Y7.2灰黄					19.0	1/8 未調	外・自然釉
80	SD02	2層	須臾器	高杯	高杯	5Y4/1灰	5Y4/1灰						1/8	焼付のみ 外・自然釉
81	SD02	2層	須臾器	高杯	高杯	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白					19.8	1/8	外・火だすき
82	SD02	2層	須臾器	高杯	高杯	7.5YR7.4に赤い黄	7.5YR7.4に赤い黄					18.8	1/8 未調	赤色顔料付着
83	SD02	2層	土師器	高杯	高杯	2.5Y7.2灰黄	2.5Y7.2灰黄					23.0	1/8 未調	
84	SD02	2層	須臾器	高杯	高杯	N5/灰	N5/灰					13.5	1/8	
85	SD02	3層	須臾器	高杯	高杯	N5/灰	N5/灰						1/8	胎付面?
86	SD03	1層	須臾器	高杯	高杯	N2/黒	N2/黒						1/8 未調	
87	SD03	1層	須臾器	高杯	高杯	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白						1/8 未調	

第2表 旧織兵場遺跡出土土器観察表(4)

遺物番号	遺物名	出土位置・単位	種類	器様	調整		色調			粘土			法線		残存率	備考	
					外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	向四石	雲母	砂粒	口径			器高
88	SD03	1層	須恵器	壺	回転ナブ	回転ナブ	NS/灰	NS/灰								1.8	
89	SD03	2層	土師質土器	小皿	赤切りナブ	ナブ	75YR7/4に赤い層	75YR7/4に赤い層								6.9	6.0
90	SD03	1層	土師質土器	小皿	ナブ	ナブ・指押え	75Y7/1灰白	75Y7/1灰白								9.8	1.8
91	SD03	1層	黒色土器	回転ナブ	回転ナブ	回転ナブ	10YR7/2に赤い層	10YR7/2に赤い層									1.8
92	SD03	2層	土師器	壺	回転ナブ	指押え	10YR8/3残層	10YR8/3残層									1.8
94	SK02	土師器	高杯	ナブ	ナブ	ナブ	75YR7/4に赤い層	75YR7/4に赤い層									1.8
95	SP03	住友 半村	須恵器	無蓋高杯	回転ナブ	回転ナブ	NS/灰	NS/灰									1.8
96	SP04	半村	弥生土器	壺	回転ナブ(割成)	回転ナブ(割成)	10YR6/4に赤い層	10YR6/4に赤い層									1.8
97	SP12	住友 半村	弥生土器	壺	ナブ(割成)	ナブ	75YR6/4に赤い層	75YR6/4に赤い層									1.8
98	SP12	住友 空堀	弥生土器	底皿	ナブ	ヘラ削り	75YR5/4に赤い層	75YR5/4に赤い層									1.8
99		堀内	土師器	壺	指押え	指押え	10YR7/4に赤い層	75YR7/4に赤い層									6.0
100		堀内(溝谷区西側)	土師器	高杯	回転ナブ	回転ナブ	25YR5/6明赤層	25YR5/6明赤層									1.8
101		遺構跡出(溝谷区東側)	須恵器	壺	回転ナブ	回転ナブ	NS/灰	NS/灰									1.8
102		遺構跡出	須恵器	杯	回転ナブ	回転ナブ	NS/灰	NS/灰									1.8
103		上面層式(調査区東側)	須恵器	杯	回転ナブ	回転ナブ	NS/灰	NS/灰									1.8
104		空倉層	須恵器	高杯	回転ナブ	回転ナブ	75YR8/1灰白	75YR8/1灰白									4.6

第3表 旧織兵場遺跡出土瓦観察表

遺物番号	遺物名	出土位置・単位	器様	瓦瓦	粘土		色調		調整		残存率
					白色砂粒	灰色砂粒	凸面	凹面	凸面	凹面	
93	SD03	1層	丸瓦	中・少	中・少	4.6	5.2	2.2	75YR6/4に赤い層	5YR6/6	1.8

第4表 旧織兵場遺跡出土石器観察表

遺物番号	遺物名	出土位置・単位	器様	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材
57	SH02	2層	削片	5.9	4.2	0.9	27.72	オースカイト
58	SH02	2層	削片	2.3	3.6	0.4	2.97	オースカイト
105		埋設遺構(区東側)	削片	3.6	4.9	0.6	12.76	オースカイト

調査区西側検出状況 (西から)

SP03・SH01 検出状況
(南西から)



SH02 検出状況 (南西から)



調査区東側検出状況 (南から)



SD02 検出状況 (南から)

SD02 土器 (82) 出土状況
(南から)



SD02 北壁断面 (南から)



SH02 検出状況 (西から)





SH02 東半埋土下層
土器出土状況 (西から)



SH02 西半埋土下層
焼土出土状況 (南から)



SH02 東半埋土下層下位
土器出土状況 (西から)

SH02 東半埋土下層下位
土器出土状況 (東から)



SH02SP27 検出状況
(西から)



SH02SP27 断面 (南から)





SH02 北壁断面 (南東から)



SH04 完掘状況 (南から)



SH05 検出状況 (南から)

SP03 検出状況 (南から)



SP03 断面 (南から)



SD08 上層土器 (66)
出土状況 (西から)



図版 8



SD03 土器 (89)
出土状況 (南から)



SH01 完掘状況 (南東から)



調査区完掘状況 (東から)

SD08 北壁断面 (南西から)



調査区東側完掘状況 (南から)

SD03・SH05 北壁断面
(南から)

図版 10 SH02 出土遺物





図版 12 SH02 出土遺物



図版 13 SH02, SH01, SD08, SD02 出土遺物



図版 14 SD02, SD03, SP03, SP04, SP12 出土遺物



報告書抄録

ふりがな	きゅうれんべいじょういせき							
書名	旧練兵場遺跡							
副書名	県道善通寺詫間線道路改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
編著者名	真鍋貴匡							
編集機関	香川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4 Tel 0877-48-2191 E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp							
発行機関名	香川県教育委員会							
発行年月日	2016年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
旧練兵場遺跡	香川県善通寺市	37204	—	34° 13' 41"	133° 46' 23"	20141001～ 20141031	112㎡	
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落跡	古墳～ 中世	堅穴建物、溝、大溝		弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・石器			
要約	旧練兵場遺跡は、縄文時代後期から中世にかけての複合遺跡である。古墳時代前期および後期の堅穴建物を中心に、中央微高地での集落の広がりが捉えられた。主な成果として、①古墳時代前期前半の良好な一括資料、②微高地上の大溝、③中世の南北の条里坪界溝、の3点があげられる。							

県道善通寺詫間線道路改修に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

旧練兵場遺跡

2016年03月31日

編集 香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4
Tel 0877-48-2191
E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp
発行 香川県教育委員会
印刷 ワールド印刷株式会社